

余華『兄弟』 上海文芸出版社(上)2005.8/(下)2006.3

釜屋 修

著者久しぶりの執筆、上下巻の刊行の時間的ズレ、上薄下厚の字数の違い、かつての先鋒作家のその後や如何…さまざまな話題を振りまいた作品であった。

浙江の劉鎮という町が舞台。李蘭・李光頭母子(父親は便所で女性性器を覗き見していて肥えつばに墜落、死亡、遺体を引き揚げてくれたのが宋凡平)、宋凡平・宋鋼(母は病死)父子の二家庭がいくつかの不幸を乗り越えて結ばれ、李光頭と宋鋼は「兄弟」となる。やっと幸せの道に踏み出すかと思ったこの「二婚」同士の新家庭は、李蘭が上海へ病氣治療に出かけた直後、文革勃発、宋凡平が「地主」として逮捕・監禁される。文革の混乱でろくに治療も受けられず帰宅を願う妻からの連絡で上海へ迎えに行こうと監禁から脱出した宋凡平は、紅衛兵に惨殺され、家庭は崩壊する。宋鋼は祖父の村に、李光頭は母と町にと、二人は引き裂かれるが、まもなく李蘭も病死、「兄弟」二人のみで町で暮らすことになる。自分の死後を案じた李蘭の根回しで二人は五金公司与福祉作業場に就職する。生前、父も母も、二人に「兄弟」として「相依為命」すること、特に李蘭は一歳上の宋鋼に行く末心配な弟李光頭の面倒を見ることを託した。宋鋼は、この義母の言いつけを守り、「最後一杯のご飯も、最後の一枚の服も李光頭にやるよ」と約束する。ここまでが(上)。(下)はページ数にして(上)の1.92倍、波乱に富む紆余曲折は、ある意味でストーリー・テラ余華の筆力の見せどころではある。改革・開放に時代に入り、「兄弟」は、兄弟の「絆」に微妙に結ばれながら、実生活では異なった道を歩む。「絆=母の遺言」「情」を至上に守ろうとする宋鋼、それをずるく利用する李光頭、まずは町いちばんの美女林紅をめぐって火花を散らす。しかしこれは純真な愛の力が勝利し、林紅は宋鋼と結ばれる。覗き二代目でもあった李光頭は、幼少にしてこの「覗き」をネタに大人たちから「三鮮麵」を半年で56杯おごらせるといふ商才?の持主、一度の失敗を経て、身体障害者作業場工場長から廃品回収で頭角を現し、リサイクル・ショップからやがて全県きってのマルチ事業家、富豪となり、「官商結託」して町の大改造にまで乗り出す。一方宋鋼と林紅は、ともに国営企業に勤め、つましいが愛に包まれた生活を営む。しかし、市場化の波が襲いかかり、勤務先の五金公司是倒産して宋鋼は臨時の仕事ばかりとなり、やっとなにか常雇いのセメント工場で肺を犯される。林紅はメリヤス工場の工場長のリストラを脅しにした下劣なセクハラに困惑、「兄弟」の生活実態は格差が大きくなる。李光頭は援助をしようとするが、林紅はかつて自分につきまとった粗野な李光頭を嫌い、宋鋼に李光頭への接近を拒む。李光頭は、

金と女に明け暮れる。林紅に失恋直後パイプカットをしたが、それは彼なりの愛の誓い＝林紅以外の女とは子どもを作らない＝でもあった。彼の哲学は「銭、才、女」への「三愛」であったが、海外を含む事業の拡大に努める一方、いつまでもマスコミの寵児でいたいと考え、劉鎮で「全国処女美人コンテスト」を開催する。この催しに便乗して一儲けをと現れたインチキ商人周游に誘われた宋鋼は、肺を侵された自分が林紅に苦勞しなくてもいいだけの金を残そうと、インチキ「人造処女膜」を売り、ついには周游について福建、広州、海南島へと行商に出かけ、「陰茎増強剤」や「豊胸パウダー」などのインチキ商品を扱う。後者にいたっては、周游に言われて自ら豊胸手術まで受ける。宋鋼の失業後、李光頭は彼には内緒で林紅に宋鋼の治療費として莫大な金を送金していた。宋鋼が南方へ出かけた留守の間に、林紅は工場のセクハラの件を李光頭に相談、李光頭はあつという間に手をまわして工場長をくびにし、林紅の李光頭への考えに変化が生じる。李光頭がロシアから呼んだ画家に描かせた肖像画の除幕式を李光頭は林紅にやらせようとし、その日林紅は李光頭に体を許し、はじめて性の喜びを知る。心は宋鋼を求め、体は李光頭を求めた。

やがて旅先で出会った故郷の友人との話から、帰郷を決心した宋鋼が帰ってみると、林紅は李光頭のものになっていた。ここでも兄弟の「情」にこだわった宋鋼は、一週間涙を流し、思い出に浸った後、心を整理すると、鉄路に身を横たえて自殺した。林紅に上海で処女膜修復手術を受けさせた李光頭、念願の「処女」林紅と交わったら宋鋼に返そうと思っていた。そのセックスの最中に宋鋼自殺の知らせが届いた。

宋鋼の葬儀を盛大に行い、多額の香典を集めて林紅に渡した。これ以降、李光頭は商売への情熱も失い、莫大な金を使ってロシアの宇宙船に乗って宋鋼の遺灰を宇宙の軌道上に撒いて自分の「兄弟」を「異星人」にするため、ロシア語を学び、体力の強化に明け暮れるようになった。金銭、物質、性欲、権力への放縦な追求の中で、人間が分裂する。純愛や誠実、兄弟の「情」との分裂に気がついたかのような李光頭が、清く生きた兄弟・宋鋼の遺灰を無垢の宇宙空間に安置したい、汚れた俗塵と無縁の世界に放ちたいと思ったのは、李光頭なりの至誠の鎮魂であったのかもしれない。

宋鋼の自殺を知った林紅は、李光頭と罵りあった後、一人で遺体と対面し、宋鋼の残した遺書を何度も読み返し、五日後茶毘に付した。劉鎮の町の人には林紅の人生は不可解だった。その後、林紅は娼館「美髮庁」の経営者となって、みんなから「林姐」と呼ばれた。恥ずかしがりの純情な美少女時代、宋鋼との恋に燃えた甘い娘時代、宋鋼だけを思っ暮らしたけなげな妻の時代、そして李光頭との情痴に溺れた三ヵ月、宋鋼死後の憂い顔の未亡人、家に閉じこもった一人暮らし、そして最後には「美髮庁」の女主人……。

中国では（上）は全体的に比較的評判がよく、出版がかなり遅かった（下）を待ち望む声も大きかった。出版部数は06年4月段階で上下計86万部とする記事もあるが実際はも

っと多いと思われる。

先鋒作家余華は、従来の道筋を捨て通俗、商業主義に堕した。／「興奮点」を設けて経営効果をねらった。／性と暴力を扇情的にあおり大衆の内心の「強者崇拜」におもねた。／ストーリー・テラーをねらったようで趙本山式のソープドラマ。／「荒誕」ではなく「荒唐」／事実認定やことばの考証がない（サッカー場、五星級、免費的午餐など60年代にはないことば）／同じく「棄医従文」だが魯迅を超えられない。／阿来の『空山』や莫言の『生死疲労』は彼らの代表作ではないが水準に達している。しかし『兄弟』は水準以下。／『在細雨中吶喊』『許三觀売血記』などには想像力のある描写があったが、『兄弟』では余華の湧き出る言語感覚がない。／待ち望んだ『兄弟』を買って読んだ、上巻では余華のユーモアや鋭利なことば使いに思わず笑ったが、下巻に入ると、宋鋼の愚昧、李光頭ののさばりぶり、林紅の墮落に到っては笑えず、暗い気分で、余華はどうしてこんなふうにしたのかと、怒りがこみ上げた（ネットの読者）。以上は一般読者や専門家の読後感の一端である。

改めて『活着』『許三觀…』と『兄弟』を読み返し余華は疑いなく、阿来に続く当代文壇の巨星である。／易しいことばだけで、すでにわれわれの記憶と視線を薄れさせている歴史をみごとに再現してくれた。／先鋒小説としては、予測不能な叙事策略を用いて成功したが、今回は通俗故事を語る策略で自分の先鋒風格を展開した。／長篇小説における「浪漫主義的復蘇」、莫言の『生死疲労』と余華の『兄弟』が代表的である。このほか陳思和、李敬澤、唐亮、喬世華、趙為民、雷達、任晶晶、洪治綱らの好意的評価もある。

例会での討議でもこの作品を成功作とする意見は少なかった。とくに女性読者の評判はよくなかった、というより問題外といった印象のように思われた（報告者の誤解であれば申し訳ない）。女性が如何に描かれたか、との視点からの反発も強かった。

私も余華久しぶりの傑作とは思わないし、今までの余華が新しい世界を切り拓いたとも思わない。ただ、改革・開放時代の中国現代社会の諸相が余華によって徹底的に戯画化されている一面を無視してはならないと思う。「覗き」とそれをめぐる劉鎮の男どもの低劣ぶり、文革期の紅衛兵たちの非人間性や政治的無知から来る暴虐（余華は文革を甘く描いた〔一部の批判〕のではなく、洪治綱も指摘するように、政治性や革命性で突出させるのではなく、文革環境における大衆の欲望と不平の捌け口という描写の窓を意図している）、改革・開放後の李光頭の際限なき「三愛」追求、宋鋼が巻きこまれるインチキ商法、行商の旅先で見るさまざまな社会的奇形、それらはすべて改革・開放後の社会の歪みがもたらした分裂であり、その頂点に李光頭が据えつけられている。作品の主題はぼやけているかに見える。余華の主張やメッセージはさだかではない。余華は困惑の中で悲鳴をあげているかに見える。上巻上梓後、下巻が出るまでの長い期間に余華はマスコミに追いまわされ数々

のインタビューに応じていて、そこからは私の言う悲鳴は聞こえてはこないが、荒唐無稽で、しかも社会にまちがいなく存在する諸相を作品に横溢させ、女性蔑視の世情も極端に描き出したが、それらは余華の思想でもなんでもなく、中国的現実への余華なりの抵抗しきれない凝視であった。改革・解放後の諸相を批判したり、道義的に糾弾するには、抵抗叶わぬ、否定しきれない趨勢が重く余華にのしかかっていた。あるいはそうした現実を自身享樂する立場に在ることに対するやりきれない自責に対する忸怩たる思いもあるかもしれない。こうした凝視が作品としての『兄弟』に何らかの力を持たせたかどうかは疑問ではあるが…。

例会では、この作品の宋鋼は、時代背景や条件は著しく異なるとはいえ、ある意味で改革・開放の激動、社会変化（+腐敗化、俗化）の中で生まれた中国式余計者の誕生という問題提起をしたが、賛同は得られなかったようである。オブローモフや内海文三はインテリであり、二人の条件も大きく異なる。宋鋼は自らを余計者とは意識していないが、自殺行為はその無意識の選択でもある。隠れ義は兄弟の「情」であった。李光头も自分が余計者の裏返しであるとは思ってもいないであろう。しかし、宋鋼死後の脱殻化、鎮魂の（なお荒唐無稽とも言えるが）行為は裏返った余計者の論理である。これらは、沈黙（無意識）の症状であり、その分無気味である。

最後に、余華自身のこの作品についての発言のいくつかを紹介しておく。「後記」は2005年7月11日の日付から見ると上巻出版後の執筆と思われるが、上下刊の裏表紙に印刷されている。

- ・《兄弟》的‘心脏’就是两兄弟李光头和宋钢——他俩是‘心脏’的‘左心房’和‘右心房’。
- ・正面写一个时代，叙述往往最困难，需要一个最独特的角度。而文革和当下时代，单独写没有吸引力。直到用李光头和宋钢两兄弟把文革和当下连接起来，就像一枚硬币的两面。
- ・（对现实的‘正面强攻’）陀思妥耶夫斯基和狄更斯等伟大作家写的小说，比20世纪的作家更有强力。他们是笨拙的，不像20世纪的作家那么聪明，那么轻巧和善于迂回。他们直来直去，正面展开攻势，而这，最需要功力。/ 小说在叙述上，选择了正面强攻，不退缩，不绕开，不用聪明的办法。
- ・西方社会是渐进式的发展，而我们的社会简直不能用突变，而只能用裂变来形容。别说10年前，5年前都想像不到今天的中国是这样。文革的时候我们把精神的狂热和本能的压抑推向了登峰造极的程度，而现在我们又把各种奇迹，美妙的奇迹和丑陋的奇迹推到了登峰造极的程度，这是促使我写这样一本小说的原因。
- ・这是两个时代相遇以后出生的小说。前一个是文革中的故事，那是一个精神狂热，本能压抑和命运惨烈的时代，相当于欧洲的中世纪；后一个是现在的故事，那是一个伦理颠覆，浮躁纵欲

和众生万象的时代，更甚于今天的欧洲。一个西方人活四百年才能经历这样两个天壤之别的时代。一个中国人只需四十年就经历了。四百年间的动荡万变浓缩在了四十年之中，这是弥足珍贵的经历。连接这两个时代的纽带就是这兄弟两人，他们的生活在裂变中裂变，它们的悲喜在爆发中爆发，他们的命运和这两个时代一样地天翻地覆，最终他们必须恩怨交集地自食其果。(この部分は後記)

7月例会(第215回) (2007/7/21)

格非「不過是垃圾」 (『長城』2006年1期)

徳間佳信

執筆再開後の格非の作品の特徴を概括したうえで、当該作品について報告した。

1. 最近の作品の特徴

- ・主題 以前に比べ相対的に歴史・社会にコミットする傾向が強い。
 - 「戒指花」・・・貧富の格差と情報化社会の危うさ。
 - 「人面桃花」・・・辛亥革命期の「近代性」の欠如、革命・政治の暴力性
 - 「不過是垃圾」・・・改革開放以来の人心の変化
 - 「山河入夢」・・・五十年代末期の急激な社会主義化の弊害、幹部の腐敗
- ・手法 リアリズムに基づきながら間テクスト性(インターテクスチュアリティ)を意識的に応用している。

2. 「不過是垃圾」について

- ・時間 1節、おもに2004年5月 2節、おもに1981年～1985年
3節、おもに1985年、2000年 4節、おもに2004年5月
- ・場所 1節、北京(李家傑の自宅) 2節、上海の某大学
3節、北京(国際ホテル)、上海の某大学 4節、北京、承德
- ・語り手 「私」＝視点人物(4節は視点人物が李、語り手が「私」)
- ・登場人物 李家傑、蘇眉、私、大学の同級生たち
- ・梗概

1節 「おれは死ぬんだ」と李家傑は私に言う。李は癌をはじめいくつもの病に冒され、